

江戸時代と明治時代の孤児養育史の概観

－儒教（古義学・陽明学）の福祉思想と家庭的養育の視点から－

金子 龍太郎

1 節 江戸時代の福祉理念 －儒教を中心に－

1. 日本における儒教の位置づけ

今日、社会福祉として制度的に解決しつつあることを、わが国の祖先は家に行わせていた。幼年期に家族からうけた介助を、子どもが成人してからは老衰していく家族に対して行うのである。しかもそのあり方は、家族成員間の人倫関係として、家族愛の形として行われた。このことにより、当時の生活水準は低かったが、幼年期と老年期は家族に守られて、安定した生活を送ることができた。そのため、欧米では社会保障として制度化されて発展していったのに対して、日本ではどこまでも家に負担させたことで、社会福祉が進まなかったともいえよう。そして、そうした福祉のあり方の根底には儒教の思想が色濃く存在したのである（松田、1969）。

吉田（1986）によれば、現代の福祉理念の基礎的部分は江戸時代までに作り上げられているのであり、日本福祉の源流として、儒教を新しい視点で見つめることを主張している。その際、良い物と悪い物を「腑分け」することが求められているという。すなわち、何を継承して、何を捨て去るのかを整理する必要性があり、日本の思想史からわが国の社会福祉に役立つと思われるものを抽出して、それを批判的に継承することが求められていると吉田は続けている。ただそこにおいても、儒教の持つ問題点として、男尊女卑思想や血縁関係を重視した家制度の思想を充分考慮しておく必要があることはいうまでもない。

本論では、儒教の中でも本来の教えを伝えるものとして、古義学と陽明学を取り上げる。古義学を唱えた伊藤仁斎は孔子・孟子の教えを直接理解することを説き、「論語」と「孟子」を第一の書とした。また、朱子学から出発した中江藤樹は、朱子学を批判して、実践を重んじる陽明学を学んだ。これらは支配される側の、民衆の立場にたった儒学といえよう。それに対して、朱子学に関しては、江戸幕府が官学として採用し、支配する側の倫理として封建社会を支えた思想であるのでここでは触れない。ただし貝原益軒だけは、仁愛思想を民衆の間に定着させた役割を果たしており、朱子学者としては例外的であるので取り上げる。

さて、5世紀にわが国に渡来した儒教は、7世紀初頭、聖徳太子の政治思想となり、思想、道德、政治の原理となった。儒教と並んで日本古来の思想・宗教である仏教には、個人の救済はあっても、人間と人間とをむすびつける秩序の思想はなかった。人間を人間関係から引き離すこと（出家）によって救済する仏教は、人間と人間とむすびつけようとする支配者にとっては不適切な教義であった。それに対して、修身・齐家・治国・平天下と、個人から天下までを

金子 龍太郎

一つの倫理でつらぬく儒教、その中でも朱子学ほど適切な思想はなかった。支配者となった武士がこの思想を採用したのは当然であった。宋の儒学、朱子学は禅僧によってすでに輸入されていたが、17世紀の江戸幕府になってはじめて、徳川家康によって官学として採用されたのだった（松田、1969）。朱子学により江戸幕府の封建社会の秩序が基礎づけられ、支配者である武士の基礎教養の学としての位置を占めた。そして、日本古来の神道や祖先崇拜と結びつき、日本的儒教へと姿を変えていき、武士が藩主のためにあらゆる自己犠牲をいとわないという、滅私奉公思想へと推移していった。そして明治時代になると、皇軍に召集されたら、家族を残して兵隊に行かねばならず、国のためには命も惜しまないという忠臣愛国思想に結びつけられていった。

しかし元々、孔子の「論語」にはそういう考えはなく、武士道や国家主義は本来の儒教ではないというのである。本来儒教は、家族主義のうえに築かれたといえ、人間存在の基盤は現実的には家であり、孔子から学ぶことができるのは、家を中心とした生き方である。社会は家庭を基盤としてなりたっているのだから、家庭を破壊することは社会基盤を揺るがすことになる。したがって滅私奉公では決してない（ひろ・山下、1993）。

2. 福祉理念としての儒教 ―古義学と陽明学を中心に―

日本では昔から育児施設は少数のまま推移したようであり、ごく一部の子どもしか施設で救済されていない。すなわち、孤児・貧児を集めて一か所に収容するというあり方ではなく、隣人や親類縁者が引き取って育てるという相互扶助で救われたことがほとんどであった。どうしても育てられない場合には、堕胎や出産後すぐに赤ん坊を殺す間引きが広くおこなわれていた。そして堕胎の場合には、この世に生まれる前に処置すれば罪悪と考えない風習があり、間引きに対しても、子どもを殺すのではなく育てないのであって、子どもにしないというので埋めるというように、その悲しい風習を正当化してきた。その背景にはわが国独特の子ども観があったようで、「七歳までは神のうち」なのだから、堕胎・間引きのは人間になっていない存在を神の元に帰すことだとしていた。このような幕末・明治初期までの間引きは、母親が育てるのをいやがって殺すというようなものではなかった。その理由の多くは、民衆の大多数を占めていた農村家庭において、年貢の取り立てがきびしく、貧困のために食料不足に陥り、多くの子どもを育てることが経済的に不可能なためであった。そして、一家の経済力にあわせて、子どもの数を制限せざるを得なかったのであり、子どもを大事にしない風習とはいえなかった。事実、間引きをするのも多くの場合、母親の意志ではなく、家の中で権力を持つ姑の指図であったという。姑に命じられて、嫁はわが子の命を断つことを余儀なくされた（中江、1985）。

古義学を唱えた、京都の町人学者伊藤仁斎の出発点は、こうした飢餓で苦しむ人々の救済と、堕胎や間引きの防止であった（吉田、1974）。仁斎は、儒教が日常生活に対する実践の学であることを、孔子や孟子の原典にかえて明らかにした。こうして、儒教は仁斎によってはじめて日本の思想となり、人間が生きている存在としてとらえられたのであり、機械論的な朱子学とはかなりの違いがある。そして、儒学が武士のものから人民のなかへ定着し、支配される側の

儒学となるにあたっては、仁斎による理論化に負うところが大きであった（貝塚、1972）。

仁斎は「論語」と「孟子」に遡って、儒教の根源は仁であることを明快に示し、仁とは愛であり、それには他人に対する思いやりが必要だと唱えた。花を植えることにたとえると、仁は花である。そして、仁を実現する方法は、その草花を咲かすために水や肥料をあたえることだという。

また、仁斎は「童子問」という著作において、平易な言葉で仁を説いている。それによれば、仁とはなにかという問いに対しては、慈愛の心があらゆるものにまじりあっている、自己の内から外部にひろがり、あらゆるところにゆきわたり、残忍で薄情な心がすこしもない、これこそ仁であると答えている。こちらには心を向けるがあちらには向けないというのは仁ではない。そして、人を愛するのがいちばん大切であり、人の心をそこなうより不善なことではない。孔子学派において、仁を学問の根本とするのはこの理由による（貝塚、1972）。

元々孔子は、人間性が完全に実現された状態を仁という言葉で表現し、仁を人間修養の究極の目的とした。そして、最高の理想である仁の徳は実践において獲得される、つまり仁は人間の行動を通じて実現されるものととらえていた。孔子が仁とは何かと問われたときに、「人を愛せよ」と答えたところからわかるように、仁とは愛であり、他者に対する思いやりといえよう。そして、「己の欲せざるところは人に施すなかれ」（顔淵第十二）（吉田、1960）として、自分が望まないことは人も望んでいないことだから、人に行わないように思いやる心が仁だと孔子はいつている。この点で、「自分を愛するように他人を愛しなさい。そして、それを実行しなさい」と教えるキリスト教の隣人愛との関連が興味深い。

次に、孔子は自分に対して誠実であることを忠と称して、それは自分の感情をいつわらずに表すことだとした。すなわち、自己の人間性の自覚が忠であり、この忠を他人に移入し、他者の身になって考えることが恕であるという。そして、恕から導き出されるといわれる仁は、自己と他者とを同じ人間として認識し、自己も他者も同じように人間として関わることであり、という。その際、その自己は孤立した人間ではなく社会的人間であり、仁とは社会的人間の自覚をいう。こうして、孔子における社会的人間の自覚は、家族の一員としての自覚から親族の一員として、さらに村落の一員としての自覚に拡大され、ついには民族の粋をこえた人類の一員としての自覚に到達するものである（貝塚、1951）。

そして、孟子においては仁という徳は個人の慈愛と惻怛（そくだつ：他人をあわれみ、心をいためる）の心からおこり、一家の中において、次には国において、さらには天下にまで拡げることと解釈する。孟子は「人みな忍びざる所あり、それをその忍ぶところに達するは、仁なり」（尽心下篇三十一）（内野、1962）として、見るに見かねての思いやりの心を、当初は何とも思わない人にまで拡げるのが仁であるといっている。

以上のように、孔子や孟子が追求したのは、他者の人格を尊重するという、あるべき人間の関係であった。儒学とはそのような人間の学である。個人の人格の尊重こそ人間が生命をかけて追求すべきものである。だから、この学は実学であり、行動の学であった（松田、1969）。

金子 龍太郎

仁斎に先立つこと19年前に生まれ、日本に陽明学を確立した中江藤樹は、学者の立場というより、農村の生活者の立場で儒教を深めていった。彼の展開した陽明学は実践的で、幕末から明治時代にかけての激動期には重要な役割を果たしている（吉田、1974）。

陽明学においては、知識が実行を伴って初めて真の知識なのであり、知と行は一つであり、分けることができないという「知行合一」の理念の基に、理論と実践との統一をめざした。また「良知を致す」として、他者の痛みをわが身の痛みと感じ、仁愛思想の基に、村落共同体の民衆にまでその思いを拡げていくことを求めたのである。したがって陽明学は実践の学であり、たとえば大塩平八郎が天保の飢饉の際に、民衆の窮状を見るに見かねて反乱の兵を挙げたのも、この陽明学の実践の立場による。

一方、貝原益軒の時代は江戸時代の幕藩体制が安定した時期で、益軒は黒田藩に仕えていたため、その福祉思想（仁愛思想）も朱子学に立っており、体制的な枠からはずれるものではない。しかし、庶民に関わる仁愛も論じ、儒教的慈愛思想が一般大衆に定着する役割を演じたといえる（吉田、1986）。ここにおいて、庶民に対する仁愛とは、誰であっても生活に余裕があれば、貧困者に物質的・精神的援助を行うことをいう。

益軒は、孟子の「仁は人の心なり」という言葉から、「己を愛する心を持って人を愛し、人と自分とのへだてをしない」といい、仁は人をあわれみ物を育てる善心であるとした。一方、彼においては、守るべき支配の秩序を共有していた。それは本来のものとは異なる、日本において修正された儒学だった。人民のなかに儒学をひろめるという益軒の課題は、実は人民のなかにすでに存在する倫理に、儒学の表現を当てはめていくことなのであった。そして家制度という体制の元で、女性と奉公人にしわよせしながらも、老人や子どもの保護を行った。しかしながら、民衆を支配する思想に基づいて体制に従っているかぎり、封建体制は支持される。家が現実に社会保障の役割を果たしているかぎり、被支配者の主体性の回復は困難だったという、福祉における朱子学の限界が、益軒の思想には含まれていたのだった（松田、1969）。

3. 二宮尊徳と佐藤信淵

二宮尊徳の報徳講は地域福祉の実践であった。彼は間引き・墮胎などの横行に心を痛め、子孫の幸福と繁栄を深く考え、子どもの福祉を実現するために事業を進めていった。それに対して、同様に間引きや墮胎の防止をめざした佐藤信淵の福祉構想は独創的ではあったが、構想だけにとどまり、実践へとむすびついたものではなかった。

まず、二宮尊徳は後世の留岡幸助や石井十次に多大な影響を及ぼした人物でもある。尊徳の生きていた徳川幕府終期、天明－安政年間には日本が明治維新の大改革を生み出す活力を養成していた時代といえる。その中であって、彼の事業は貧しい農民の救済であった。尊徳は貧困にあえいでいる農民に対して、勤勉・儉約を勧め、予剰金をもって貧乏人を救済する資金にあてたり、来年の肥料を購入したりして、今日の共同組合・信用組合のような事業を行い、次々と貧しい農村を救っていったのである。そして、こうした尊徳の事業が成功したのは良い弟子に恵まれていたからである。

彼は地域福祉の開拓者かつ成功者といえ、たとえばスイスの Pestalozzi の事業が失敗したのと対照的である。尊徳の社会事業・救貧事業は、ある点において欧州のそれよりすぐれていたものであり、イギリスの救貧法のように、貧民に金品を与えるのみでは怠惰な貧民を再生産するだけなのである。それに対して、農民に農具を与え、それをもって田畑を耕し、作物を育てることで自立させる方向に持っていく、生業扶助の精神に立脚した実践を行ったのが彼の事業であった。飢餓を乗り越え、墮胎や間引きの横行を防ぐために、一生懸命働き努めることこそ必要なのだということを民衆に訴え続けた。そして、貧富相和し、貧乏人も資産家も共に良くなるように導いてこそ、はじめて社会が円滑に推移すると教え、実行したのであった（児玉、1970）。

彼は報徳主義に立っており、報徳とは、万物の創造主たる天の大徳に報いるために、人間の小徳をもって行うことを意味している。その内容は次の通りである。

自助主義－天は己を助くる者を助く。

他愛主義－他人を愛するために自分の余裕ある部分を譲る。

共同主義－人ひとりでは小さな力を合わせて大きな事業を行う。共同一致しなければ大きなことはできない。

尊徳は儒学者ではなく、理論的に学問を深めたわけではないが、その実践には儒教の思想が色濃く反映されている。たとえば、「二宮翁夜話」の中では、仁は人道の最高のものだが、儒者の説ははなはだむつかしくて用をなさないと言っている（福住、1887）。それゆえ、彼の教えは実行を尊ぶ。実行があつて初めて、教えが生きたのであった。

一方、儒教思想の限界を感じ、経世思想に立ち、絶対主義的統一国家の建設によって、様々な問題を收拾し、救済政策を行おうという人物の一人が、江戸時代の末期に現れた佐藤信淵であった。彼はその著書「垂統秘録」（1859）の中で、当時としては画期的な福祉施策を論じている。その中では、貧困家庭の乳幼児を対象とする、今でいえば乳児院や養護施設にあたる「慈育館」や、保育所に相当する「遊児廠」を構想したが、時代を先んじた構想は当時の社会や為政者からは危険思想とみなされ、実現にはいたらなかった。今日でも示唆に富む彼の考えを紹介しよう。

まず、二万石以上の土地には小学校を建て、子どもたちの教育にあたる。そして、小学校の管理下に、広済館・療病館・慈育館・遊児廠・教育所という5つの施設を置くというものであったが、この中で児童福祉に関係するのは慈育館と遊児廠である。

慈育館は貧民の乳幼児を養育するところで、一万石の土地に3か所程設ける。その四方に塀や垣根を構え、中には長屋を何棟も建て、さらに長屋を仕切って、一部屋に7人から10人までの子どもを住ませ、まだ弱っていない村の老人や、体が弱くて仕事に就けない者が子どもの養育に携わる。館の中には役人が泊り込み、各地から送られてきた乳幼児を受け入れるなどの職務を行い、子どもの衣類はすべて官から支給される。子どもの父母や親族は、毎日その部屋に行くこともでき、菓子や玩具を与えることも自由である。また、子どもを家に連れて帰った

金子 龍太郎

い時には、役人にいえば帰らせることができる。こうして、この館では4、5歳までの子どもを養い、それ以後は遊児廠に送るのである。

次に、遊児廠は子どもを遊ばせるところで、一万石の土地に20か所ほど置き、四方に垣根を構えて、その中に家を建てて子どもの寝る場所とする。そして、慈育館と同じく、老人や身体の弱い人たちに子どもの世話をさせる。慈育館から来た子どもたちも、親と一緒に生活している子どもたちも、昼はここで遊ばせる。それは両親の仕事の邪魔にならないようにするためである。ここで遊ばせる子どもは4、5歳から7歳までで、8歳になれば村の教育所に引き渡す。このように、乳児院・保育園・幼稚園などの諸施設が、一貫した教育や福祉の場になっており、今日においても十分通用する、時代に先駆けた構想を提示したのであった。

「垂統」とは、天地に代わってその意思を継ぎ実行し、その事業を子孫に継承するという意味である。「垂統秘録」は信淵の救済思想の中心で、よい政治を行い、大きな事業を残すための方略を記したのであり、その内容は絶対主義的富国強兵思想と救済政策の両面からなる。そして、彼の構想は娼婦を認め、人身売買を肯定するなど問題が多い。そのため社会主義者と帝国主義者という異なる両面を持った人物といえる（碓井、1971）。

2 節 明治時代の児童福祉 —石井十次と留岡幸助—

1. 明治時代の概観

明治以降、社会福祉に儒教を流入したのが渋沢英一で、「仁政」「惻隱の情」を理念の中に打ち出していった。一方、石井十次も留岡幸助もプロテスタントで、彼らの養護理念と実践は、欧米から学んだ西洋的福祉だが、その源流をさかのぼってみれば、江戸時代の思想、儒教に行きつく。留岡の考えでは、慈善事業には儒教の「惻隱の情」が基本であり、それをキリスト教で鍛えて永遠なるものにしていくのである（吉田、1986）。こうして、東洋と西洋の思想が融合され、新たな段階に向かう時代が明治期だともいえよう。

明治時代の中期になると、欧米からの社会・経済制度の移入や工業国家・軍事国家への移行によって、新たな貧富の差が出現し、社会的弱者の問題が生じてきた。その当時のわが国は近代化を急ぐとともに、日清・日露戦争の勝利を通じ、着々と富国強兵という国家目標を達成していたが、その一方で、生活様式の急速な変化と都市労働者の増加などにより、社会的貧困が顕在化してきた。さらに、1891年の濃尾大震災や1905年の東北・関東地方の大凶作によって、社会問題が拡大していった。しかし、明治政府の姿勢は非常に消極的で、1871年の岩倉視察団においても、欧米の社会福祉の制度については何も導入せず、日本の社会福祉の制度はなきに等しい状態だった。わずかに、1874年恤救規則の実現をみたに過ぎなかった。この法律は今でいう生活保護法に当たるものだったが、その対象は限られ、支給された米もわずかなもので、とても社会福祉とはいえないものだった。そして、戦争が繰り返される中で、世の中の恵まれない人に対する救済の手は明治期を通じてなかったといえる。幕末の江戸町会所での救貧率に対して、恤救規則による救貧率は百分の一にすぎず、明治政府は社会福祉を行う責任を放棄し

たといえ、民間の篤志家が社会事業に手をつけざるをえなかった（柴田、1983）。

こうした世情の元で、多くの子どもたちが家族から見捨てられ、貧困と不幸な境遇の元に置き去りにされた中で、彼らを救済しようとする慈善事業が、宗教家や地方役人などの民間の間から設立されていった。育児院（孤児院）としては、1869年の日田の養育院が最初とされるが、その後、1880年代の終わりにかけて、次々と児童施設が誕生していった。その主なものをあげると、1872年のカトリック教徒による慈仁堂、1879年仏教徒による福田会育児院がある。また、プロテスタントでは1887年石井十次が創立した岡山孤児院、さらに儒教（朱子学）に基づく1889年創立の北村藤三郎による広島修道院などがある。

この中で、広島修道院を創設した北村藤三郎の場合を紹介しよう（広島修道院、1989）。当時、広島地方は1887年頃から凶作が続き、大飢饉が襲来して巷に孤貧児があふれていた。北村は悲惨な世相を見つめて、貧困家庭の児童や孤児の救済を行うことを決心し、自宅を開放して数名の孤児を引き取り、学用品や衣類を与え、父母に代わって養育し始めたのが1889年の1月であった。北村は当初、尋常小学校の校長として勤務しながら、夜間の教育を始めた。そのうちに1895年の日清戦争になると、急激に孤児が増加して80名に及ぶようになり、ついには屋敷内に百名収容できる120坪の院舎を新築して、公職を離れて慈善事業に専念することとなったのである。

これらの民間社会事業の中でも、わが国の児童福祉の先駆的施設とみなされ、後世にも多大な影響を与えたのは、何といても石井十次の岡山孤児院と留岡幸助の家庭学校（教護院）であった。以下ではこの2人の事業を取り上げて、明治時代の児童福祉を概観しよう。彼らの事業は教育の理念に基づいており、当時の福祉界においては異彩を放っていたが、現在においても学ぶべき点は多いと考える。

2. 岡山孤児院の創始者：石井十次

石井の孤児院は子どもの可能性を信じた教育の理念に基づいている。そこには個性を認め能力に応じて、独立した人格を持った個人を教育しようとする意図があった。その教育方法としては、家族主義（小舎制）を採用し、一戸建ての家で、一人の婦人が10人位の子どもの世話をすることにより、できるだけ家庭的な養育を行おうとした。次に、彼の教育で特徴的な点としては、労働と学問を両立させており、活版印刷・精米・機織りなどの労働を通しての教育があげられよう。石井は労働を人物養成において最も良いあり方だと考えていた。こうして、彼の孤児教育は家庭的な教育、および労働と学問の並行による教育を2つの柱として展開していった（江草、他、1978）。

石井の教育理念には西欧の思想が大きく影響していた。彼は、Rousseau・Pestalozzi・Rock・Spencerなどの伝記を読んで大きな感銘を受け、それらの教育思想を取り入れることに努めた。中でも特に、Rousseauの影響を受け、子どもの本性を重視し、子ども自身の伸びゆく力を信じ、子どもたちの関心や興味を尊重し、体験を通して教育することの重要性を学んだ。Rousseauの「エミール」からの影響やPestalozziの教育哲学から、石井は労働と教育を両立さ

金子 龍太郎

せるという考えをさらに確立していった。また、労働による生活自立を行った背景には、「慈恵により、孤児が自らもうけえないパンを彼らに与えるような救済事業は、ただ愛の姑息手段にすぎないだけでなく、かえって彼らの罪業を増す」という考えがあった。そして、1902年には小舎制の家族主義を採用した。これはイギリスのバーナード・ホームの形態を取り入れたものだった。

さらに、石井は孤児教育をいかにすべきかということを深く考えた末に「時代教育法」を発見した。時代教育法とは、幼年・少年・青年のそれぞれの年齢に応じた教育を行うことである。それによれば、第1の幼年時代（10歳まで）は、身体の弱い者とともに宮崎県の農山村地帯の茶臼原で生活を送らせ、その豊かな自然の中で自由に遊ばせることにより、主として身体を鍛えることに重点を置く。次に、第2の少年時代（10歳から15歳）には、身体の丈夫な子どもを岡山の都市部に連れ帰って、この6年間で初等教育を受けさせる時期とする。さらに、第3の青年時代（16歳から20歳）になると、小学校卒業後、本人の希望により院内で実業教育を受けさせたり、地域の農工商家の求めに応じて奉公させ、社会で自立できる能力を備えさせた。今でいう、自立援助ホームをすでに取り入れていたのである。

その後、1908年には宮崎県の茶臼原孤児院に主力を注ぐようになった。多数の子どもを抱え、岡山の市街地が孤児教育に不適當であり、また孤児に対する学校教育の限界を感じていたからと思われる。彼は晩年には二宮尊徳の報徳社の思想に基づいて、茶臼原での事業を展開していった。茶臼原の大自然の中で、子どもたちの個性を伸び伸びと発揮させ、農業を中心とした労働を通して、将来独立しうる技能をみがき、理想的な生活共同体を建設しようとしたのであった。と同時に、親のない子どもを子どものない家庭で育てるという孤児救済の理想を実現するための里親の養成にも携わった。

以上のように、彼は孤児の保護・救済のあり方を教育に基づいて行った。人間の発達における教育の不可欠な役割をしっかりとふまえて人間教育を展開していったのであった。そして、形式的なキリスト教を強制せず、人生の中で信仰とか敬虔さの必要性を感じるための宗教教育、子どもには言葉で教えるより、まず自分から行動するのが大切だと説く実行主義、できるだけ旅行の機会を与えて見聞を広めさせようとする旅行教育、そして集団の教育力を強調する米洗教育などは、いずれも彼の孤児教育を特色づける教育思想であり、実践であった。こうした、四半世紀にわたる岡山孤児院の事業は、石井の死とともに消滅したといえるが、彼の事業は単に福祉にとどまらず、広く教育の世界にも多大な影響を残したのであった。

しかし、石井の晩年には岡山孤児院そのものの存在にも疑問を持つにいたった。岡山孤児院の院児たちの多くが大阪南部のスラム出身者であり、その院児たちが岡山孤児院を退所したあてこのスラムに入り、その子どもが施設二世として再び孤児院に入所したという例があった。石井はこの事例に愕然として、20年にわたる孤児院の事業は何だったのかと自問せざるをえなかった。そして、孤児院事業の限界を感じ、孤児発生そのものを防ぐ、地域福祉事業、すなわち防貧事業に取り組んだ。さらに里親開拓にも取り組むが、明治時代においては成功にいたら

なかった（柴田、1983）。

彼の事業が失敗した原因としては、感動即実行型の性格で、深く思索することなく、思いついたらすぐ実行してしまうため、自らの身体や家族を犠牲にしてまで行った事業運営のあり方があげられよう。また、別の理由としては、後継者を育てられなかったことがあり、石井は「孤児院事業に於ける最大困難は、金の乏しきに非ず、食物の足らざるに非ず。実に院役者殊に直接に彼等を養育するに適当なる人の得がたきに在り」と述懐していることが留岡によって紹介されている（同志社大学、1979）。

3. 家庭学校の設立者：留岡幸助

留岡は北海道の監獄職員（教誨師）となった1891年頃、成人犯罪人の矯正事業に限界を感じ、青少年の感化事業に従事しようと考えた。彼は監獄での教誨師の指導ではもはや時遅く、不良少年が14、5歳になるまでに学校で教育しなければならないと強く感じ、教育施設を作るために、アメリカ視察を1894年から2年間行い、1899年に巣鴨家庭学校を創設したのだった。彼はその後1904年にはヨーロッパへ視察に行っており、当時世界最高の感化院といわれていたドイツの Wichern が創設した Rauhes Haus を訪れたり、Pestalozzi が設立したブルクドルフの学校も訪問している。中でも留岡が影響を受けた Wichern の教育方針の根本はキリスト教の愛であり、農作業中心に、家族主義、自治制、そして宗教教育を重視した処遇を行っていた（同志社大学、1980）。

留岡幸助の教育理念は、子どもがどのような悪事を働いても、これを犯罪と見ることなく、子どもはどこまでも子どもとして扱い、全て教育的方法によって感化しようとするものであった。彼の考えによれば、人間を矯正感化するためには、教育の力が不可欠であり、教育は全ての不良、不徳、罪悪を改善する唯一の良薬であり、刑罰をもってするのではなく、教育的指導によって感化事業を行うことをめざした。彼の学校では、感化院という名称をやめて、「家庭学校」としたのもそのためである。その基本理念は「家庭にして学校、学校にして家庭」という家庭学校の中で、一人一人の非行少年と日々向き合う中で教育しようというものだった。この考えは教誨師としての体験とアメリカでの視察から生み出されており、家庭学校の塀のない敷地は近隣住民の憩いの場所であり、現在の北海道家庭学校は公園のようであるという。このように、自然が人を感化するという留岡の考えを実証する場が家庭学校なのである（同志社大学、1979）。

また、実際の処遇方法としては家族制度を採用した。家庭舎は教師夫婦によって管理運営され、それぞれが10-15名の児童たちの父母代わりとして生活全般の指導に当たった。そして、この形態が現在でも夫婦小舎制として存続している。留岡は、教育の目的は人格の開発であり、個性の育成であると考えた。したがって、家庭ではもっぱら個人を重んじ、人格を尊び、自我を発展させることを大切にすべきであり、一人一人の自我の確立の上に、社会全体の発展が見られるのだと主張したのだった（土井、1974）。

こうして、小舎制の家庭を築いた上で、普通の家庭と同様のあり方で学業や労働を行い、家

金子 龍太郎

族舎では必ず朝夕に、炊事、水汲み、清掃、園芸などの家事に従事させた。留岡は、このように家族のために働くことを身につければ、数年経つうちに不良青少年といえども、必ず他人のために働く人間になることを信じていた。

彼によれば、規律のある愛情に満ちた家庭を作り、ここで教育することが大切であり、規律ある労働に従事させるのが最も効果あったという。その方法としては、Rousseau, Pestalozzi, Fröbel らの、家庭を第一と考える教育思想の影響を受けて、家庭学校には洗濯部、木工部、農業、園芸の4部を設置し、少年たちを労働につかせた。人間の道德心は、気づかないうちに家庭内の平凡な日常生活の中において養われるもので、書物や講義などから得た知識は実際には役に立たないと彼は考えていた。

彼は教育事業の基礎をキリスト教においていた。また、教育実践を農作業を通して行っていたが、その方法を採用するにあたって、二宮尊徳の事業から大きな影響を受けた。さらに、留岡は事業を始めるための必須条件として基金をあげており、財界の協力を広くとりつけた。政界・行政・財界・学会などの幅広い人脈に支援されて、事業を展開し、安定した運営を続けた。

とはいえ、入校してきた非行少年たちの対応には困難を極めた。彼らは筋金入りの不良であり、職員は一時も油断できず、夜間も見張りのために休めないまま、徹夜することも普通であった。1902年には、少年の放火によって家族舎が全焼するという事件も起こった。そのため、教職員の出入りも激しかったのである（土井、1974）。

こうしたこともあって、留岡幸助も石井十次と同様に、人材の確保に苦労したようであり、「実に慈善事業の成功するとせざるとは、院長其人を得るを得ざるとにもあるが、最も大切なことは、適当なる院役者（教師、保母、事務員）を得るを得ざることである。適当なる院長を得ても、適任の教職員を得るにあらざれば、孤児教養事業は決して成功しない」と述べている（同志社大学、1979）。ただ、石井と異なる点は、職員を養成する機関を実際に設立したところにある。それは、職員養成機関としてはわが国最初のもので、慈善事業師範部という名称だった。入学資格は20歳以上の健康な男女で、入学試験に合格したものとした。試験は数学、地理、歴史、漢文、作文、生理学だった。また、教育期間は2年で、学科は聖書、神学、慈善事業、歴史、英語、心理学、社会学、教育学、倫理学、犯罪学、実務演習で、その他に女子には音楽、料理、裁縫が課せられた。留岡の構想としては師範部をさらに発展させて、社会事業研究所にまで広げ、研究機関を併設して、講堂や寄宿舍の新築を行う予定であった。しかしながら、実際には適任者がなかなか得られず、理想にはほど遠かった。師範部生徒の在籍期間は6カ月未満が大半で、2年以上在籍したものは24名中2名に過ぎなかった。結局、この構想は成功したとはいえないが、明治時代に民間事業の経営と福祉実践にあたりながら、職員養成の重要性を認識し、実行に移したという事実は特筆すべきである。

最後に、留岡の事業の成果の一端を示すものとして、次の数字をあげておこう。巣鴨家庭学校において、創立から大正8年までの統計によると、入学総数361名、終了生302名のうち、改善卒業は214名で、事故退学は23名、結果不良の者は35名、などという内訳になっている。約8

割の青少年が何らかの職業について社会的に自立しており、その教育は成功したといえる（土井、1974）。

引用文献

- 土井洋一 1974 家庭学校研究ノート ―巣鴨家庭学校を中心に―。 社会事業研究, 2, 51-84.
- 同志社大学（編）1979 留岡幸助著作集 第二巻. 同朋社
- 同志社大学（編）1980 留岡幸助著作集 第四巻. 同朋社
- 江草安彦, 他 1978 石井十次の孤児教育とその思想. 旭川荘研究年報, 10, 57-67.
- ひろちさや・山下龍二 1993 世界の聖典3 ひろちさやが聞く 論語. 鈴木出版
- 広島修道院 1989 広島修道院百年史.
- 福住正兄 1887 二宮翁夜話. 森田 孝・飯島 衛（訳）1938 日本教育文庫 二宮尊徳・佐藤信淵, 33-98. 東京第一出版協会
- 貝塚茂樹 1951 孔子. 岩波書店
- 貝塚茂樹（編）1972 日本の名著13 「伊藤仁斎」. 中央公論社
- 児玉幸多（編）1970 日本の名著26 「二宮尊徳」. 中央公論社
- 松田道雄（編）1969 日本の名著14 「貝原益軒」. 中央公論社
- 中江和恵 1985 日本人の子育て再発見. フレーベル館
- 佐藤信淵 1859 垂統秘録. 森田 孝・飯島 衛（訳）1938 日本教育文庫 二宮尊徳・佐藤信淵, 151-184. 東京第一出版協会
- 柴田善守 1983 社会福祉の哲学的基礎づけについての覚えがき（3）―明治期の社会福祉―. 大阪市立大学生活科学部紀要, 31, 301-319.
- 内野熊一郎 1962 新釈漢文大系4 孟子. 明治書院
- 碓井隆次 1971 佐藤信淵と河上 肇 ―帝国主義思想と社会主義思想―. 社会問題研究 21, 1-20.
- 吉田賢坑 1960 新釈漢文大系1 論語. 明治書院
- 吉田久一 1974 社会福祉と諸科学1 社会事業理論の歴史. 一粒社
- 吉田久一 1986 社会福祉思想の日本の特質. 吉田久一（編）社会福祉の日本の特質, 53-153, 川島書店